



関西支部国際交流企画 研究者海外派遣 報告

関西支部では国際交流企画として2022年11月23–25日にタイにおける研究所訪問と学会参加を企画し、大阪大学の本田孝祐先生と筆者の2名で参加した。11月23日は、タイ国立遺伝子工学バイオテクノロジーセンター（BIOTEC: National Center for Genetic Engineering and Biotechnology）を訪問した。BIOTECは、バンコクから車で北に1時間ほどの距離にある国立の研究所である。BIOTECに到着後は、Sutipa Tanapongpipat氏、Niran Roongsawang氏と日本とタイにおける生物工学分野の最新の研究動向や国際共同研究の可能性などについて意見交換を行った。その後は、BIOTECの施設を案内いただいた。最新鋭の質量分析装置や自動培養装置などが一通り施設内にそろっており、生物工学分野の研究を行うには十分な環境が整っていた。東南アジア地域の各国から施設を利用するため研究者が集まる状況であるとの説明があった。

11月24–25日はバンコクで行われたThe 34th Annual Meeting of the Thai Society of Biotechnology and International Conference (TSB2022)に参加した。1日目は、Thai Society for Biotechnology (TSB) 会長であるPenjit Srinophakun先生と大会実行委員長のNiyom Kamlangdee先生の挨拶で始まり、直後に1件目の基調講演として、本田先生から超好熱菌由来の酵素を用いた人工代謝経路の*in vitro*再構築に関する発表があった。その後は、招待講演やポスター発表が行われ、夕方からは懇親会が開催された。招待講演では、タイ国内のみならず台湾など海外からの参加者が多数発表しており、コロナ禍後の国際交流が再開しつつあることを実感した。ポスター発表では、タイの大学院生による英語のスムーズな発表と質疑応答が行われており、タイの英語教育レベルの高さを感じた。昼食時や懇親会では、Penjit先生やNiyom先生をはじめ、TSBの主要メンバーと交流を深めることができた。

2日目は、筆者が午前の招待講演において、化学修飾酵母による有価金属イオン回収に関する発表を行ったのに加え、午後には「TSB-SBJ Joint Session ~ Unique Biomolecules and Biomaterials for Well-being Society-Case Studies in Japan and Thailand」と題したシンポジウムを開催した。日本からは本田先生と筆者、タイからはNujarin Jongruja氏 (King Mongkut's University of Technology Thonburi)、Surisa Suwannarangsee氏 (BIOTEC)、Nalinpat Jaruwachanthanat氏 (PTT Public Company Limited)ら3名が参加し、合計5名による講演が行われた。本田先生からはシンポジウム趣旨の説明や日本生物工学会の紹介の後、人工的な非酸化的解糖系の構築と応用についての発表があり、筆者は大腸菌由来の外膜小胞の生成機構や物質生産への応用に関する内容を発表した。Nujarin Jongruja氏からは、超耐熱性酵素の特性評価や応用について、Surisa Suwannarangsee氏は酵母の表層提示による有用物質生産について、Nalinpat Jaruwachanthanat氏からは天然産物の商品化や植物内生菌の開発に関する発表があった。本シンポジウムを通じて、現地の若手研究者との有意義なディスカッションを行うことができた。筆者にとって初めてのTSBへの参加であったが、日本とタイの交流のこれまでの経緯についても理解を深めることができたため、今後の両国の若手研究者の交流を進めるきっかけとして、この経験を生かしていきたいと考えている。

(関西支部企画幹事 大阪公立大学 尾島 由紘)



BIOTECにて、写真左から本田先生、Sutipa氏、筆者



写真右は、Nalinpat Jaruwachanthanat氏